

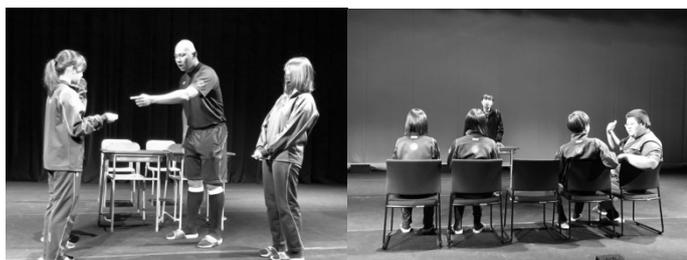
3. 1 探究活動の指導法 I 演劇での地域課題把握から探究接続

本校では開校初年度より、1年次に「演劇を通して地域の課題を知る学習」を実施してきた。これまで、生徒の特性に応じた演劇プログラムのブラッシュアップに並行して、演劇から探究への接続について試行錯誤してきた。演劇で得た学びを探究に上手く繋ぐことが課題であった。演劇という対話的実践の場において、ダイナミックに獲得した学びが、その後の探究活動にどう生かされているのか。演劇を総合学習の時間に取り入れたことによる生徒と教員の関わり方の変容をまとめる。

(1) なぜ演劇なのか

演劇プログラムで、生徒は集団創作という協働的な関わりの中で学んでいく。学びは、「対話」を通して他者との間で生まれ、意見も考え方も違う他者と向き合う中で、自らの学びが育まれる。また、演劇の場で関わる他者には、一緒に創作を行う実在の「他者」に加え、演劇作品の中に登場する、まだ出会ったことのない想像上の「他者」も含まれる。時間や空間を超えた多様な「他者」との関わりの中で学んでいくプログラムである。

本校の授業内容については、第2章 研究開発の内容・活動実績の「地域創造と人間生活」にて詳しく述べているため割愛する。地域を歩き、人と出会い、そこで見えてきた課題を演劇で表現することで地域課題を立体的に捉えるという目的は当初から変わらないが、開校後より7年の年月を経て、双葉郡を取り巻く環境や生徒の震災との距離感も変化中、プログラム内容も変容を続けてきた。ワークシートを用いて脚本を書き上げていくスタイルから、コミュニケーションを重視したインプロ(即興演劇)へと変えた。演劇を創ることが目的ではなく、そのプロセスの中で、「対話」や「コミュニケーション」を通してしか乗り越えられない壁を乗り越えさせる意図を持ってデザインした。対話の種類は大きく分けると以下の3つである。



・地域の大人との対話(地域×生徒、地域×地域)

生徒達は、入学後に双葉郡8町村バスツアーに参加し、双葉郡と出会う。後に地域の方々の取材に入る。震災から10年以上が経ち、震災との距離感も多様な生徒達が、地域の方々との対話を通して、震災当時から現在に至るまでの話や現在課題と感じていることなどを取材していく。初めのうちは、生徒たちにとってそれらは演劇を創作するための素材でしかなく、実感を持って取材対象の話や腹落ちさせることは難しい。取材対象をきちんと理解するには、その人だけでなく、その人を取り巻く社会についても理解する必要がある、そのためには足りない情報を補わなければならない。

他者を演じるということは、その人物を代弁してしまう可能性を有する。また、生徒達が作った作品を取材対

象本人が見るということは、その人が語る様々な事柄の中から生徒が何を切り取るか、言い換えると、その人が生徒たちの目からどう映ったのかが表出することとなる。



取材対象やその周りの方々を自分の身体を使ってなぞることを続けているうちに、そしてそれが誰かの前に現されてしまうという「責任」を感じる中で、生徒たちは「他人事」ではいられなくなる。自分の演じる他者は、目の前にいて、固有の人生を歩んでおり、すぐに触れられる生身の身体を持っていて、実際に自分が現実世界で関わりを持ち、その人生を変化させる可能性を有するのだ。そこで迫ってくる責任感は重いものがあるが、それが演劇を媒体とした対話のなせる技であり、他者を演じるという非日常的な演劇体験を「遊び」にさせないための仕掛けである。そして、それらの作品を鑑賞し、実際に舞台に立った生徒たちや、客席の生徒たち、審査員、取材対象である地域の方々と対話をすることで、重層的な「主体的・対話的で深い学び」が実現しているのだ。



取材対象の視点で客観的にこのプログラムを分析する必要もあるだろう。取材・FWから最後の演劇の発表会までの数ヶ月間、生徒たちとの対話から地域の方々にどのような変化があったのかは、これまでアンケートのような客観的なデータを取ったことはない。しかし、発表会の後の対話の時間において、このプログラムが、取材対象に良い影響を及ぼしていると感じた。地域の方は、自分のことを知ろうとしてくれている生徒の想いに触れ、そのことを大変肯定的に受け止めてくれていた。また、震災直後ではあり得なかった、立場を超えた対話も見られた。極端に言えば加害者と被害者のような関係性だっ

た人々の間に、生徒たちの演劇を通してお互いの当時の想いを知り、お互いの境界を超えて新たな対話が生まれる場面もあった。

「境界を越える」とは、自らが引いた境界が揺らぐことである。境界とは自分のモノの見方に関わるものであり、人が自らを納得させるために整理し、すなわちカテゴリー化するという大きな力によってつくられる。震災当時、そうすることで自分の心を守ってきたであろう（当時はそうすることが正解であったと思う）方達が、震災後10年以上経ち、生徒との対話や、演劇を通してそれらの境界が揺らぎ、自分と他者を全く異なるものとして区切る視点自体が疑わしいものとして現れる。演劇を見ることで他者の記憶を追体験し、自分が自分でありながら他者に「なる」ことで足場を揺るがされるとき、境界が揺らぎ、自分の見方で他者を判断する眼差しは相対化され、その先に対話が生まれるのだ。

・演劇を創るチーム内での対話（生徒×生徒）

演劇的手法を用いた活動で生徒は、グループ活動という普段とは違う他者との関わりの中で、話し合いながらFW先を決め、取材の役割分担をし、取材した内容を演劇にしていく。

往々にしてグループ内で意見の違いは生じる。演劇を創るために構成された男女混合のグループ編成はクラス担任に委ねられており、それぞれの教員が様々な意図を持って生徒を配置している。そのようなグループの中で対立や分断が生じた時、それは平穏なものばかりとは限らず、時には葛藤、衝突、軋轢が伴う。一見、上手く行っているように見えるグループも、よく観察すると、一部のリーダータイプの生徒が主導で話し合いを進めており、その他が傍観者だったりする。

傍観者というのは、対話や活動に参加しようとしないう、聞いているふりをしているだけで無関心な人、自己開示しない人、嘘をついたり、正直に言わない人などのことだそう。嘘をつくということは、「自分という個人として他者と関わらない」ということであり、会話をしているように見えても実は会話をしていないということだ。（『他者の靴を履く』ブレディみかこ著）。

意見の違いをネガティブなものとして捉え、傍観者であることで乗り越えるべき壁を避けており、対話が成立していない班は、作品が深まらずに表面的な部分をなぞったものとなることが多い。逆に、あらゆる壁にぶつかり、上手く行っていない班ほど、それらの対立や分断を対話によって乗り越えた先に完成した演劇は、こちらが驚くほど地域の課題を捉えた素晴らしいものとなっている。



【生徒たちの対話の例】

他県出身のトップアスリートの男女と、浜通り出身の生徒、中通り出身の生徒らで構成された班での話である。この班は、浜通り出身の女子生徒Aの希望により、大熊町で家族を津波で失いながらも伝承活動を続ける木村紀

夫氏を取材した。しかし、FWにて大熊町の帰還困難区域にある木村氏の自宅を訪問することとなった際、Aが見えない放射能への不安から、参加を辞退したいと申し出た。Aに振り回されていると感じた生徒たちの創作意欲が下がり、グループ内で対立が生まれ、雰囲気も悪くなってしまった。WS講師や教員と相談の上、話し合いの場を設けた。出身地も、本校に進学した理由も、震災や原発事故に対する認識もバラバラな生徒たちが、お互いの考えを共有したことにより、価値観の違いを認識できた。自分とは違うもの、自分は受け入れられない性質のものでも、他者として存在を認め、その人のことを想像することができた。大変理性的な対話であり、その場にいた教員は静かに感動を覚えた。その対話がまさにエンパシーそのものだったからだ。その後、その班は素晴らしい作品を創作した。生徒たちは、まさに双葉郡で起きている「分断や対立」を自分たちの班の中で体験し、対話を通して乗り越えたことで以下のような感情が生まれたという。Aの感想である。

「対立が生まれた時、心が苦しくなったけど、そこで逃げずに向き合っただけで対話をするのが偏見や差別をなくすことに繋がると学びました。（中略）みんなの考えが違うほど時間もかかり、まとめるのも難しかった分、多様な意見や考えがうまれました。演劇は年齢や性別、人種を超えて人と人を結び、相手や自分のことを知ることでできるものだと思います。同時に、双葉郡の問題も対話によって解決されていくべきものだと思います。」

これらのことから、学びは、「対話」を通して他者との間で生まれるものであると分かる。時にそのやりとりはダイナミックで騒然としたものになりうるが、他者を眼差す自らの視点に気づき、境界が揺らぎ、変化する自分自身を知ることは、これまで見えていなかった他者の側面を見て、関わり方を柔軟に変えられるという生き方を作り直すことにもなる。

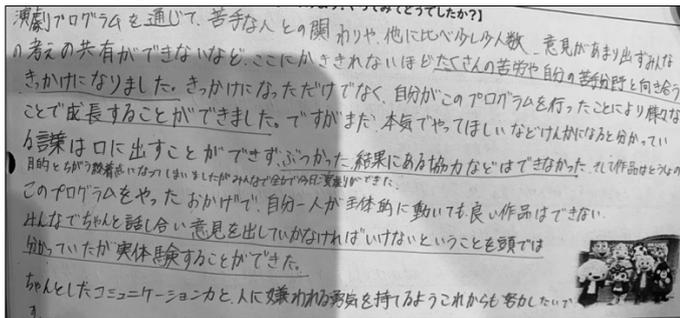
・演劇プログラムを通じた自分自身との対話（メタ認知）

演劇的手法とは、「表現」することが目的ではなく、自身の身体を通して他者・仲間・ひいては地域と主体的に関わることで生徒自身が経験し、考え、変容することである。

演劇プログラムでは、生徒一人一人に冊子が配られる。授業の終わりに必ず振り返りを記入させ、その中で生徒たちは自らの行動を客観的に「省察」していく。意識的に自らを振り返る時間を取ることで、自分の言動や行動を俯瞰して見つめ直し、常に改善しようとする意識を持ち、次の行動に繋げることができるようになる。この能力は、本校が育てたいルーブリックの項目の1つである、「自らを振り返り変えていく力（メタ認知）」である。

1.あなたはどれくらい積極的に貢献できましたか？(数字に○)
十分・5 4 3 2 1 ▶ 不十分
どうでしょう？
2.あなたはどれくらい積極的に発言できましたか？
十分・5 4 3 2 1 ▶ 不十分
3.発言するとき、相手にわかりやすく伝えることができましたか？
十分・5 4 3 2 1 ▶ 不十分
4.あなたは他の人の意見を耳を傾けられましたか？
十分・5 4 3 2 1 ▶ 不十分
5.あなたは班の議論の前に進めることに貢献できましたか？
十分・5 4 3 2 1 ▶ 不十分
6.タイムキープを意識し、議論をまとめることに貢献できましたか？
十分・5 4 3 2 1 ▶ 不十分

創作期間中は、渦中ということもあり冷静に振り返ることができない生徒もいるが、全ての演劇プログラムが終了した後の全体振り返りは実感を伴った深い対話があちこちで生まれる。ポジティブなことだけでなく、「最初は嫌だった」「やりたくなかった」というネガティブなことも聞くことができる。それは、演劇を通して生徒たちが自己開示できたことと、それらを共有できる関係性を作ることができたことの現れである。これらのプログラムによって生徒たちが何を体験し、考え、変容したのかを言語化させることで活動の意味や意義をとらえる。評価が対象とするのは、学びの結果ではなく、学びのプロセスになる。



(2) 教員の関わり方の変容

生徒の成長には、それを見守る教員の関わり方が重要である。本校では7年かけて、演劇の授業が市民権を得ることができた。生徒の成長が大きな証拠となっているからである。しかし、これから演劇を取り入れようとしている学校は、教員の理解を得る際に難しさを感じることもあるだろう。

授業に演劇的手法を取り入れるということは、実践者が意図する、しないに関わらず、現行の教育に異議を投げかけるものとなる。さらに、それらが身体や感覚、スピリチュアリティの領域に踏み込んだ活動であることがさらに相互の理解を難しくさせる。実践者のねらいは抽象的であり、生徒の状態に応じてどんどん変えていかねばならないし、これらの活動が育てる生徒たちの力はすぐには目に見えにくいものであるし、数値でも測りにくいものであるからだ。

しかし、対話、身体、関係、創造、想像。これらはすべて演劇が大切にしている要素でもある。時に「対話」を通して他者との間で学びが生じる時というのは、そのやりとりそのものが衝突や軋轢を伴うものとなることがある。そのため、これらを制限することなく伸び伸びと生かしていく演劇プログラムは、現在の教育の在り方や教員の関わり方を部分的にあるいは全体的に批判するものになってしまう。そこで重要なのは、演劇プログラムに関わる教員のマインドセットである。教員は、これまでの授業における「インストラクター」としての生徒との関わり方、「ファシリテーター」としての関わり方に変容する必要がある。ファシリテーションの語源はラテン語の「facilis」で、「する・つくる」(facio)ことが「できる・ありうる」(ilis)ようにするという意味である。「する・つくる」のは学習者であり、それが「できる・ありうる」ようにするのが我々の仕事となる。

他者をコントロールしない。これがインプロ（即興演劇）におけるファシリテーションの考え方である。コントロールしようとすれば、コントロールできなかつたらどうすればいいかという恐怖がうまれる。また自分の思い通りにいかなかった時に、無理矢理に未来や他者をコントロールしようとしてしまう。まずは今、生徒のまわりで起こっていることをよく観察する。生徒をどうやって支援できるかを考える。その際に前提となる考え方は「人は人を変えることはできない」という考え方だろう。演劇的手法においては、我々が生徒を変えることはできない。もし生徒が変わることがあるならば、それは生徒が自分で変わったということである。我々がができるのは学習者が自ら変わるときの支援である。

生徒が民主的な社会の形成者として、問題解決能力と市民的資質育成の学びが生成されるためには、「教師から生徒への一方的な知識伝達」を受動的に受けさせられている状況を克服しなければならない視点が見えてくるのだ。未来とは受け取るべく与えられるものではなく、人間によって創造されるべきものである。そのためには人々は「傍観者」ではなく「行為者」にならなければならない。それにより生徒が自分と世界との関係を変えていく時、我々教員はどのように関わっていけば良いのか。

対話を育むWSの態度と行為について

- 1 生徒と教師は学び合う
- 2 教師も知らず、生徒も知らないという自覚から始める
(無知の知の自覚)
- 3 教師と生徒が対話により創造する (対話の学びの生成)
- 4 教師と生徒は耳を傾けあう (協働と他者尊重の関係)
- 5 教師と生徒で公共性を作り出す
(意識化から主権者となるプロセスへ)
- 6 生徒が学習内容を選択し教師はファシリテートする
(生徒の主體的な探究姿勢と教師の支援)
- 7 生徒が行動し教師はそのことから学ぶ
(異化による気づき、傍観者から行為者への学び)
- 8 生徒が問題意識からテーマを決めて探究する
(問題の関心と解決への意欲)
- 9 教師は父権主義から解放されて生徒と関わる
(権威性からの解放)
- 10 教師と生徒の関係を注入の主体客身体関係から対話する協働の探究者の関係に変容する
(「演劇教育とワークショップ 学校という劇場から」(論創社) 第3章『演劇は学びを民主化できるのか』より)

インストラクター、ファシリテーター、メンター、そして学習者など、複数のアイデンティティをゆるやかに持つこと。教師自身も、自分はいかにできない、これしかしてはいけなくて決めつけるのではなく、生徒のありのままを観察し、その混沌を冷静に見つめる。そこで自身に起きる葛藤も楽しんでほしい。時には生徒と一緒に悩むフリをし、生徒が前に進むための後押しをする。こういう悪く言えばいい加減さ、よく言えばしなやかさを持った教員が今後さまざまな人との関係の中で創造的に実践を作り出していけると考える。その中で、教師自身も学び、教員としての関わり方を探究していくのだ。そしてこのマインドは探究を進めるにあたって必ず必要

3. 2 探究活動の指導法Ⅱ 探究カリキュラムの開発について

【本校の探究を開発するに当たって】

◎社会の変化による「総学」から「総探」への変化

総合的な探究の時間の学習指導要領が総説で述べているように、現在の生徒達が成人して社会で活躍するときには、生産年齢の人口減少やグローバル化、技術革新等により、予測困難な時代がやってくると考えられている。これまでの社会は明確な課題があり、それに対してどうアプローチすれば正解かを求めることが目標となっていた。しかし、現在の社会、これからの社会では、さまざまな価値観からさまざまな課題があり、「唯一絶対解」ではなく、答えのない課題に対して、多様な他者と共同しながら「目的に応じた納得解」を見出す必要がある。

教育の分野でも大きな変更がなされてきている。学習指導要領の中で、「総合的な学習の時間は、課題を解決することで自己の生き方を考えていく学びであるのに対して、総合的な探究の時間は、自己の在り方 生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し、解決していくような学びを展開していく。」とあるように外に存在している一般的な課題だけではなく、自分自身が問題を設定し、課題を設定していくことが求められる。

【探究の3つの型】

これまでの探究の実践から、指導をしやすくするために探究を3つの型に分類した。

- ① 基礎研究型探究
- ② 問題解決型探究
- ③ 未来創造型探究（課題達成型探究）

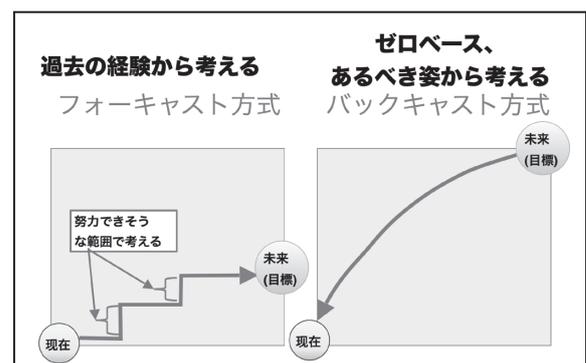
まず①は真理を追い求めるような探究である。科学の分野だと、山中教授のiPS細胞の研究のようなものであり、情報の分野だとブロックチェーン技術等、いわゆる基礎研究に近いものを想定している。本校では、再生可能エネルギー班などで、新しい発電方法などの探究がこれに当たる。②は、今現在目に見えているネガティブな事（顕在的な問題）やこのままだと起こることが予測できる問題（潜在的な問題）を解決する探究であり、総合的な学習の時間でも行われていたような探究である。③の未来創造型は、問題をとらえ直し、新たな課題を見だし、新しい価値や価値あるものを作り出す探究である。探究を進める上で、②の問題解決型の探究は、（地域）社会で共有された問題であり、共通の課題であるため、解決の方向性がある程度見える。そのた

め、参考事例があり、生徒が探究を進める際にアドバイスが受けやすいが、すでに行われていることをなぞることになったり、地域の活動の中に都合良く組み入れられたりする可能性がある。一方で、③の未来創造型の探究は、一般的に言われている問題や課題を再設定することから始めるため、具体的な解決アクションが（地域）社会で行われていることが少なく、オリジナリティのあるプロジェクトを行うことが可能である。

【問題と課題の設定について】

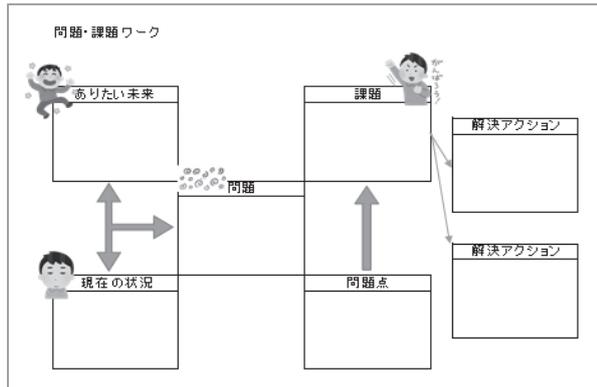
以上のようなことを踏まえ、探究プロセスの中の、課題設定を次のように進めている。本校では、課題と問題の違いをビジネスの分野で使われている定義で進めた。「問題」＝達成したい目標と現状の差、「課題」＝その差を埋めるために起こすべき具体的な方向性。さらに、達成したい目標についての次の2種類に分けた。「本来あるべき状態」と生徒それぞれが考える「ありたい状態」である。消しゴムを例にすると、「あるべき状態」はしっかり消しゴムとしての機能を果たすことであるが、「ありたい状態」はさまざまあり、その一つとして、「角で消す心地良さが続く状態」とゴールを設定することで、カドケシという本来の機能以上の付加価値を持つ商品を生み出すことができる。「ありたい状態」を達成したい目標にすることで、達成することでより付加価値の高いゴールを生み出す「課題」を設定できるようになる。この考えは、「バックキャストイング」の発想をもとにしている。

バックキャストイングとは、最初に目標とする未来像を描き、次にその未来像を実現する道筋を未来から現在へとさかのぼって考える手法であり、現在を始点として未来を探索するフォアキャストイングと対置される。フォアキャストイング型のシナリオ

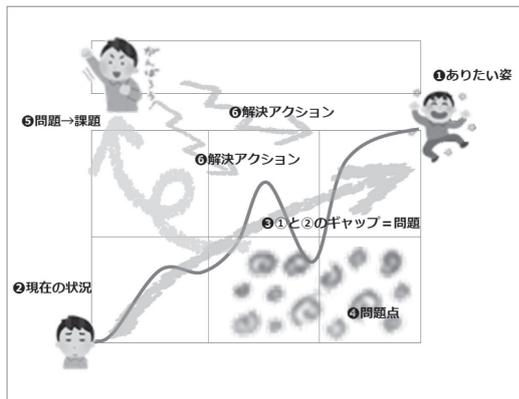


作成手法は、現在の延長上に将来を描くことについて有効だが、現在とは全く異なる未来を描くことは困難。それに対して、バックキャスト型シナリオ作成手法は、現在の状況を前提とすることなく、描きたい将来を定義するので、劇的な変化が求められる課題に対して有効とされている。

以上のことを踏まえて、「問題・課題ワーク」を作成し、生徒に対して課題設定を実施した。このワークを使い、ありたい未来を設定することによって、未来創造型の探究を進めることができる。



【問題・課題ワーク】



【問題・課題ワーク (フューチャーマッピング版)】

【生徒の未来想定能力向上のための取り組み (バックキャスト型を効果的に働かせる方策)】

1 Future Mapping

Future Mapping は、創造的課題解決を目的とする企業研修を手がける神田昌典氏により開発された思考法である。バックキャスト型の発想で、課題を達成していくために必要な、幾重もの思考レイヤーを一枚のチャートにまとめたもの。一般的な問題解決のフレームと異なり、理想の未来と現状とのギャップを埋めるストーリーの力を使うことで、枠を超えた発想と結果を生み出す行動シナリオを作り上げ実現させることができる思考法である。

このフューチャーマッピングを使うことで、物語の流れと状況の変化を想像できることから「問題・課題ワーク」を、より現実的行動に移すシナリオ作りに行うことができる。言い換えると、課題解決までの流れが、ストーリーとして作られ、さらに、作成段階から、問題解決プロセスを想像の中でトレースしてわくわくする臨場感を感じることもできる。横浜国立大学・教育学部高本真寛先生とベネッセ教育研究所の共同研究では、自律的動機付けがされた生徒だけでなく、外的動機づけによって学習を行っている生徒も学習それ自体の楽しさに気づく契機となりうることを示されている。

5期生は、1年次生の「産業社会と人間」でキャリア教育の一環として行い、2年次の探究の時間、原子力防災探究ゼミで探究テーマの深化を目的に、石ヶ森久恵先生を講師として迎え実施した。この思考法を使うことで、探究におけるプロジェクト設計が紙一枚で完成する生徒もおり、これからの探究学習のフレームワークとしての可能性が非常に高い。

2 問題/課題の再設定の考え方

問題と課題の設定方法の考え方を応用した方法を取り入れた。一般的な問題や課題に対して、問題・課題ワークで分析し考察することで、(地域の)問題や課題を新しい観点から再設定することができる。例としてあげると、「少子高齢化」という現象に対して、理想状態を「社会システムを維持できる若手人口の維持」とすると、問題自体が「少子化」になりその課題が今行われているような方向性になる。一方で、理想状態を「AI やロボットによる労働力の維持」とすると、課題は、「テクノロジーの発達と社会における積極利用」になり、「少子化」が問題ではなくなる。このように、一般的に言われている問題や課題と言うスタート地点とは異なる観点から探究を行うことができる。

*オックスフォード大学でAIの研究を行うオズボーン准教授が2013年に発表した論文によると、「(当時の調査から) 10~20年程度で約47%の仕事が自動化され、人間の職が奪われる」と報告され、野村総研の2015年のレポートでも、「(当時から) 10~20年後には日本の労働力の約49%がAIで代替可能」と報告されている。しかし、この問題・課題ワーク的発想で、一般的に言われる問題/課題にとらわれず、新しい問題を見だし、それをスタートラインとして課題を設定することで、それまでの枠組みと

は異なる観点で、新しい解決アクションを考えることができる。

3 クリエイティビティに対するアプローチ

令和元年度の1年次の「産業社会と人間」において、「調べ学習アワード」という取り組みを行った。それまで、本校では「調べ学習」に対して、「調べ学習になっては良くない」等、非常にネガティブな印象を持っていた。しかし、探究を進めていく際、幅広くとことんまで調べる力は非常に重要であり、それは探究に限ったことではないので、より価値のある「調べ学習」になるように指導する試みを行った。1つのものを調べ尽くした後、自分の興味のあるものを掛け合わせることで、価値を創造するという講座を行い、クラス毎に代表を決め発表会を実施した。5期生長岡嘉人の発表では、漫画「キャプテン翼」について調べ、作品について調べた後、「リーダー」の在り方という観点で最終的にまとめた。以下まとめから

・・・リーダーには「トランザクティブリーダーシップ」と「トランスフォーメーションリーダーシップ」と言う考え方がある。前者は、飴と鞭を重視する従来型であり、後者は、啓蒙を重視するヴィジョンナリーな型である。キャプテン翼は30年前の作品であり、当時のリーダーについての考え方は前者であったが、作者高橋陽一氏は後者の価値に気づき、キャプテン翼を描いていた。不確実な現代社会で求められるのはビジョン啓蒙型のリーダーが求められる。30年前の漫画「キャプテン翼」に影響を受けたビジネスマンを見ると、新時代のリーダーを育成するための良い素材になっていたと思われる。
(長岡嘉人の発表より)

このように、足し算で増やした知識に新しい概念を掛け合わせることで、より深い考察ができるよう

になった。この足し算とかけ算の発想は、実際の探究の中でも使われており、特に「解決アクション」の中で、自分の好きなことや興味あることを掛け合わせることで、よりクリエイティブなプロジェクトがうまれた。例としてあげると、「地域の記憶を伝える×ゲーム＝マインクラフトで地域を作る」、「地域に新しい産業を生む×南部鉄器＝鉄卵の研究」、「地域交換留学（3期生の探究）×デジタル＝VR 双葉郡ツアー」、「避難経路×祭り（2期生の探究）」等である。

4 メディアリテラシー（新聞やテレビの使い方）の育成

正確に現状を把握するために、マスメディアに対する向き合い方を伝える必要がある。新聞やテレビ等マスメディアのニュースは「事実＋メディアの考え」という点で2次情報であり、情報に色がついているということを理解させた。メディアの情報は、あくまで、1次情報へのアクセスのためのキーワード探しととらえさせ、事実に対するエビデンスの重要性を伝えた。

5 未来リテラシーの育成

“ありたい未来”を設定する際に、ある程度の未来予測ができることで、より可能性の高い未来を設定することができる。博報堂生活総合研究所の未来年表

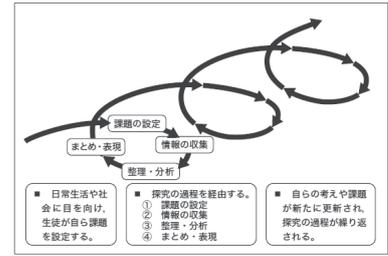
(<https://seikatsusoken.jp/futuretimeline/>) の様な情報にアクセスすることで、より具体的なありたい未来を設置できる。未来に起こりうるテクノロジーの進化や社会の変化に対する情報にアクセスできる力を「未来リテラシー」と定義し、これから起こりうることに對する生徒のアンテナを高くさせる取り組みを行った。

【探究プロセスをアクセラメンツの学習サイクルを使って再構成】

1 探究プロセスの開発

「学習指導要領（総合的な探究の時間編）」で探究における生徒の学習の姿という形で探究プロセスが描かれているが、実際の現場に落とし込むためには、より具体的な探究プロセスを作らなければならないと考えた。探究のカリキュラム開発の際に、生徒の探究学習が効率的に加速するようにアクセラメンツを導入した。アクセラメンツは、Peter Klein 博士とアメリカの Paul R. Scheele 博士が開発した学習カリキュラム作成のための方法論である。また、学習者は①受容的に物事を吸収するステージ、②生成的に仮説を立てるステージ、③持続的に検証を行うステージという3つのステージを経験する。その要素を基に以下のような「未来創造探究プロセス」を作成した。

探究における生徒の学習の姿



未来創造探究プロセス							
	Stage1	Stage2(1)	Stage2(2)	Stage3	Stage3	Stage3	Stage4
	問題発見 課題設定	現状分析	解決仮説	解決アクション① 考察 新たな課題	解決アクション② 考察 新たな課題	解決アクション③ 考察 新たな課題	考察 論文作成 進路実現
探究内容	問立て 目標設定 研究動機 背景材料	調査 調査のためのアクション 整理・分析	解決のためのアクション仮説 構造化した問題・課題との関係 性を知る	解決のためのアクション 考察 より本質的な問題の発見 新たな課題設定 具体的な解決アクション	解決のためのアクション 考察 より本質的な問題の発見 新たな課題設定 具体的な解決アクション	解決のためのアクション 考察 より本質的な問題の発見 新たな課題設定 具体的な解決アクション	考察 論文作成 進路実現
協働/個別	協働で行うと良い段階			プロジェクトごとに個別で行うべき段階			考察と論文
探究段階	調査研究			解決のためのアクションと考察			考察と論文
			発表会	発表会			発表会
カリキュラム 段階	産社/2年次生前期		2年次生後期		3年次生前期		3年次生後期
具体的行動	【調査のためのアクション】 文献調査/インターネット等を使った調査 アンケート調査/フィールドワーク 諸団体との共同調査			【解決のためのアクション】 実験/プロジェクト実施/大学との共同研究 企業との共同研究/行政との共同プロジェクト /プロジェクト実施のための資金準備等			論文作成 セルフエッセイ完成 進路実現
	【考察】 輪読・読書会 生徒同士でのディスカッション/教員とのディスカッション			【考察】 報告・発表を通じたフィードバック/教員とのディスカッション 仮説と実施結果の比較/学会等によるフィードバック			
生徒の態度 の変容	受容的態度 (Be Receptive)	生成的態度	持続的態度				
	生成的態度 (Be Generative)	受容的態度	受容的態度	受容的態度	受容的態度	受容的態度	受容的態度
	持続的態度 (Be Persistent)	持続的態度	生成的態度	生成的態度	生成的態度	生成的態度	生成的態度
総合的な学習 の時間							
総合的な探究 の時間							

2 実社会でのアクションの定義（調査アクション・解決アクション）

ここで大きく改善したことがもう一つある。これまでの探究の中で、生徒に対して、実社会に出てアクションを起こすことを促していたが、現状を把握するためのアンケート調査などと地域行政への提言というようなアクションでは質的に違うため、前者を「調査アクション」、後者を「解決のためのアクション」と区別しプロセスの中に入れたことだ。設定した課題に対して、しっかりした調査を行うことで、課題に対する仮説を生み出し始める。そのアイデアをしっかりと形にし、今度は実社会でそれを検証する。そこから得られたフィードバックを生かし、さらなる仮説検証を行う。この探究プロセスは、教員だけでなく生徒自身が見ても、自分自身が今どのステージにいるのかが明確に分かる。

3 生徒の態度変容と教員の関わり方

生徒の態度変容に着目すると、それぞれのステージでの適切な関わり方がわかる。教員はそれを適切にモニタリングできるように、生徒それぞれの知性、生徒の探究の進み方、生徒の探究を止めてしまう事象などを意識し、適切に関わる必要がある。それを構造化したものが次の表である。

生徒は、探究者として課題に対して“受容的に正確に物事を吸収するステージ”では、印象ではなく正確に事実をとらえ客観的に考える必要があるため、教員はインストラクターとして厳しく接しないといけない。“生成的に仮説を建てるステージ”では、アイデアをどんどん出したり、似たような事例を参考にしたりと発想力が重要になるため、教員はファシリテーターとして生徒のアイデアを引き出し、ジ

エネレーターとして生徒の中に入り一緒にアイデアを出していく役割になる必要がある。そして、実社会で“持続的に検証するステージ“では、生徒の背中を押してあげられるメンターになることも必要である。この態度変容については、明確にステージごとに変化するわけではなく、もっと小さいサイクルでも起こる。教員はそれをしっかりとモニタリングし、適切に関わり続けたいといけない。

◎教員の生徒への関わり方

1 インストラクターとして

- しっかりと課題設定のための、未来像を個人、または班の中で共有させる。
- 国内・世界の問題の構造にも興味が持てるように、インプットをする。
- 物事について、現在/過去/未来の観点でとらさせ、因果関係等についても考えさせる。
- 何のための調査、現状把握なのかをしっかりと意識させる。
- 現状把握の際の調査においては、文献だけでなく実地調査、RESAS等の最新の情報にアクセスさせる。
- 学校だけでは不可能な計画がある場合、外部との連携で可能になるかどうか柔軟に考えさせる。
- 考察については、①テーマと自分、②テーマと他の事例、③テーマと世界の問題の3つについてのつながりを意識させる。
- 論文作成については、アブストラクト(要旨)をしっかりと作ったうえで、規定にのっとった形で作成するように指導する。
- 企画書などの作り方を伝え、実現するために必要なことなどを自分から気が付くように配慮する。

2 ファシリテーター/ジェネレーターとして

- 生徒自身の探究だけでなく、他の生徒や、実社会で行われていることなども知れるような環境づくりをする。
- ブレインストーミングについては生徒が安心して発言できるように、またブレーキをかけることの無いようにファシリテーションする。
- 一見不可能に見えるアイデアであっても、問いかけを通して深化させる。
- 人と違うことを楽しませる。

- 未来ビジョンを想定させるときには、自由に行わせることができるだけ創造的に行わせる。
(様々な未来予測などを使う)
- 先生自身も一緒に楽しんでアイデアを出す。

3 メンターとして

- 生徒自身がどんどんチャレンジできるようにバックアップする。ただし、外部での活動に関しては、必ず学校側が把握できるようにする。
- 常に生徒が、ポジティブな未来を語れる(語り合える)雰囲気づくりをする。
- 生徒が持続してチャレンジできる環境作りをする。

【探究論文ルーブリックについて】

今年度、5期生に対して論文指導する際に「論文ルーブリック」を作成し、実施した。これまで、体系立てた論文指導がなかったことと、本校の探究の目指すべき4つポイント(①全国や世界の課題と照らし合わせた考察があるか。②課題解決に向けた調査や実践の報告があるか。③社会や未来に向けた提言があるか。④地域や社会の変革に繋がる特筆すべき成果があるか。)を生徒に意識させ言語化できるようにするという目的で作成した。大きく変更した点は、文字数を10,000字以上から以内に変更した。生徒が文字数を確保するために無駄に長くなり、論旨がわかりにくくなること、さらにバカロレア等の論文の規定が日本語8,000字以内と言うような文字制限であったことを参考にした。

論文ルーブリックを利用して分かったことは、論文の作成の方向性を生徒が理解したことで、各自が論文構成を洗練させることができたと言うことである。また、もう一つの大きな変化は、多くの生徒が、こちらから指導しなくても英語での発信を始めたことである。アブストラクトだけでなく、論文すべてを英語で作成した生徒もいた(論文集に掲載している)。

【今後の展望】

1 探究プロセスの改善点

5期生に探究プロセスをベースに進めてきて、課題の設定の難しさを体感した。ある程度のインプットがなければ課題設定ができないと考え、トライアル的に原子力防災探究ゼミで、帰還困難地区の双葉町等にフィールドワークに行った。それが大きなきっかけになり、探究プロセスが回り始めた。このことから、Stage2(2)の解決仮説の段階で、課題の再設定を行う必要がある。

生徒の探究取り組みステージと態度変容						
生徒の探究に対するあるべき態度の変容	Be Receptive (受容的に正確に物事を吸収するステージ)		Be Generative (生成的に仮説を立てるステージ)		Be Persistent (持続的に検証を行うステージ)	
	生徒思考・行動	該当のガガワガ	生徒思考・行動	該当のガガワガ	生徒思考・行動	該当のガガワガ
生徒の各変容フェーズにおける望ましい具体的態度や行動	①Think Flexibly ①柔軟に考える	意見が自由になるような学習づくり	①Seek Complexity ①自分の探究以外のこととの関係を探す	異論時に物事を捉えるようなアドバイス	①Take Risks with Courage ①勇気をもってリスクをとる	アクションを起こす習慣作り
	②Inquire ②詳細に探究し、様々なところから情報を引き出す	正確な情報収集・分析への強い探究	②Think Fluently ②アイデアが溢れてきたら、流れ続けるだけ考え、記録する	意見が自由になるような学習づくり	②Imagine ②より良い未来を想像し続ける	未来ビジョンを常に意識させる習慣作り
	③Access Expanded Brain ③直感を無視しないで積極的に活かす	誰でも受け入れられる学習づくり	③Combine ③人と違うことを楽しむ	他の人との強みを理解しあえるような学習づくり		
			④Elaborate ④アイデアを細部にまでこだわり洗練させる	課題にアイデアを浮かべさせるような学習		
探究フェーズ(簡易版)	探究フェーズ1 (仮テーマ設定)		探究フェーズ2 (本テーマ設定)		探究フェーズ3~4 (プロジェクト実践と考察)	探究フェーズ5 (まとめと発表)
	問題と課題設定 現状を正確にする		現状を他のこととつなげる 課題解決の仮説を立てる		プロジェクトを実施する フィードバックをかける (繰り返す)	
教員の役割	インストラクター		ファシリテーター ジェネレーター		メンター	

2 オンラインを通じた地区を越えた協働

コロナ禍により、ICTの活用が非常に活発になった。それにより、距離にとらわれない協働の在り方を探ることができた。実際、これまでも、3期生の渡邊美友のように他県の高校生との協働を行ってきた生徒はおり、非常に価値のある探究にしてきた生徒がいる。オンラインを活用することでやりやすくなると思われる。また、海外の生徒との協働も可能になる。探究ではないが、2020年に英語の授業で、アメリカの高校との協働学習やトルコの高校とプロジェクト学習を進めた。コロナによるロックダウン等で、最後まで達成することはできなかったが、世界共通の課題を踏まえた探究の深化、それに伴うプロジェクトの立ち上げを行う可能性を感じることができた。

3 未来創造型探究(課題達成型探究)

予測不能の社会に対して、価値を創造する未来創造型探究を生徒に挑戦させることが必要である。その際に、客観的事実を基にした現状把握をベースに、クリエイティブ思考を使ったプロジェクトを立案し、探究テーマを深めていく生徒を多く育成していくことで地域に対しても、さらに生徒自身の能力育成にも利益があると感じる。

3. 3 外部連携

本事業を行うにあたり、昨年度からコンソーシアムを構成し、双葉郡教育復興ビジョン協議会や福島大学などと連携し、地域から海外まで、様々なグループとの連携を意識的に推進してきた。今年度もコロナ禍により現地に赴くことができなかつたり、直接会って話ができなかつたりする等、活動に大きな支障が生じた。一方ではオンラインの活用によって移動の制約がなくなり、時間さえ合えば校内で様々な方と容易に話し合うことができるようになった。オンラインツールは慣れてしまえば大変便利であり、これを活かして逆境をチャンスに変えることにより新たな連の形が進み、生徒の様々な取組が面的、質的、量的に大きく展開してきた。ここでは外部連携の経緯や状況等について、「地域知」と「専門知」に分けてまとめた。

3. 3. 1 コンソーシアム

(1) はじめに

昨年度に結成したコンソーシアムによって、これまで以上に外部連携を強化することとした。また、外部連携が教員個人の繋がりを活用しているケースが多く、長期的に連携を進めるには組織同士で連携する必要性はあるという課題は引き続き解消しなければならない。

(2) コンソーシアム

今年度のメンバーは以下のとおりである。

双葉郡教育復興ビジョン推進協議会	笠井 淳一 氏
福島大学 人間発達文化学類	中田スウラ 氏
福島相双復興推進機構	桜町 道雄 氏
福島イノベーション・コースト構想推進機構	山内 正之 氏
NPO 法人カタリバ	横山 和毅 氏
福島県教育庁	丹野 純一 氏
本校校長	柳沼 英樹 校長

今年度は令和3年7月と令和4年度の1月に協議会を実施した(コンソーシアムの記録については巻末に記載)。

コンソーシアム協議会では、まず本事業の目的や目指す人材育成像の確認を行い、今年度の開発計画の進捗状況を共有し、意見交換を行った。昨年度から双葉郡8町村との連携を面的に広げたので、今年度はその関係強化を進めてきた。具体的には地域の課題を把握するためのインタビュー取材先を福島相双復興推進機構に紹介していただくなどの新たな取り組みを行うことができた。また本校で行ってきた地域の方との連携の状況を説明し、具体的な連携方策について検討いただいた。

また、第2回では7期生1年次生の製作した「トリチウム水」を題材として扱った演劇を観ていただいた。委員の方々から取組みが蓄積され、課題の捉え方が進化しているのご意見を頂いた。

(3) 今後の展望

今年度は地域創造と人間生活における演劇プログラムの深化ができたが、2年生以降の「未来創造探究」への

継続性については、引き続き課題が残されている。同じ地域に住んでいるのに多様な意見が出る理由について、複眼的な検証作業をフィールドワークに組み込んでいく必要がある。

3. 3. 2 地域知連携

(1) はじめに

本校では開校当初から地域の課題探究活動を学校の教育活動の中心に据えてきた。本校が所在する福島県浜通りは震災原発事故が起きた地域であることから、社会課題が顕在化しており、その課題の解決のために頑張る大人が他地域に比べると多い。このような方々を本校では「地域知を持つ方」あるいは単に「地域知」と呼んでおり、開校から7年目となる現在、「地域知」は増えてきている。一方、ターゲットとする地域が本校の所在する近隣に限定されてきことが課題の一つとなっていた。そこで今年度も双葉郡8町村全域での活動を展開した。

(2) 地域知連携

「外部連携を個人的なつながりから組織としての網切りにする」ことを目標に、コンソーシアムを軸とした連携を模索した。また、1年次に行く双葉郡8町村バスツアーで行った場所・出会った人の影響で2年次の探究学習を始まる生徒が増え、生徒が教員を介さずに地域の方々と直接つながる事例が生まれてきた。また、それに伴い、生徒が地域の祭りに参加するなどの取り組みが生まれてきた。

・葛尾村との連携：葛尾村で活動している下枝浩徳氏(葛力創造舎)との繋がりが深くなり、葛尾村でのイベント実施等の探究活動が始まった。

・川内村との連携：葛尾村のケースと同様、1年次のバスツアーで川内村を訪問するようになった。演劇のテーマ設定の場として川内村役場にお願ひし、村長である遠藤雄幸氏にもインタビュー等で関わっていただくことができた。

(3) 今後の展望

年度当初に目標とした双葉郡8町村への活動展開をほぼ達成することができ、多くの「地域知」と繋がることのできた。教育と地域復興の相乗効果を目指し、この方向性を引き続き継続していく。

3. 3. 3 専門知連携

(1) はじめに

前述した「地域知」に対して、生徒の考えた探究テーマに関連した学術的な見識を持った方を「専門知を持つ方」あるいは単に「専門知」と呼んでいる。本校がある地域には大学や研究機関はほとんどなく、結果的に専門知を持つ方との接点は限定的であった。

(2) 専門知連携

オンラインの利用が日常的になったことで、今まで地理的な制約で接触できなかった方と容易につながることができるようになり、専門知へのアクセスが容易になった。また、今年度は早稲田大学との連携が強化され、早稲田大学高大連携リエゾンマネジャーを校内に常駐することとなった。このため、主に理系分野の生徒と「専門知」を持つ複数の研究者とのアクセスを容易にし、ふくしま学(楽)会などで生徒が外部研究会に参加することを促す体制が出来上がった。

生徒のテーマと関連のある、適切な専門知につながることも容易ではない。これまでは教員が仲介役を担っていたが、教員の人脈にも限界がある。今年度は、これまでの担当教員の仲介に加え、ふくしま学(楽)会でお世話になっている松岡俊二先生(早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授)、永井祐二先生(早稲田大学環境総合研究センター准教授)が仲介役を申し出てくださり、これまで以上に複数の専門知とつながることができた。

(3) 今後の展望

専門知との連携により、新たな見方、考え方が加わり、探究活動そのものの進展、深化がみられた。今後も引き続きこの環境を活用していきたい。

3. 3. 4 国際連携

(1) はじめに

開校以来、本校は海外国際機関の関係者や、海外の学校との交流を継続してきた。海外研修のみならず、海外から日本への修学旅行や視察・研修の受け入れ実績も

多く、都度、授業内での受け入れ・交流や参加者を募ったプロジェクト型の交流を行ってきた。

COVID-19の感染拡大以後、国内外を行き来しての研修や交流の場面は限られてしまった。しかしながら、Zoomを用いたオンラインでの交流が継続されている。

(2) 実施内容

授業内交流:イギリスWoodbridge Schoolとの交流(英語表現1 Zoom実施) 本校生徒と現地で日本語を履修している学生と文化交流を行った。

プロジェクトによる交流:ドイツ研修の代替研修として、Ernst Mach Gymnasiumの学生や教職員と交流が続いている。また、NY研修の代替研修として、国内在住の海外留学生を招待し、福島県の浜通り地域を案内するツアーが行われている。(それぞれ後述)

卒業生などの活躍:OECD東北スクールと福島大学の行ったイベントの実行委員として本校の卒業生と教職員がかかわった。また、過年度実際に現地交流を行ってきた9.11家族会との交流は続き、3・4期生がオンライン会合に参加した。その様子はテレビでも報じられた。

AFS生徒との日常生活:母国の政情不安により、昨年度から引き続きミャンマー生1名と、今秋から本校で生活しているベトナム生1名をAFSアジア架け橋プロジェクトから受け入れている。それぞれ2年次と1年次のHRに在籍し、本校生と一緒に学んでいる。普段は寮生活もともにし、閉寮期間中は通学生の自宅にホームステイをした。また、学校行事の代替案として国際問題を取り上げ、全校でパネルディスカッションを行うことに貢献した。

(3) 成果と課題

オンライン交流によって、つながりを持ち続けることは容易になった。しかしながら、本来直接交流することによって習得されていたであろう身体知は、オンラインによる完全な置き換えがきかないものである。

本校5期生となる現3年生は1年次のドイツ研修を実施することができたが、6期生以降は1度も海外研修の現地渡航ができていない。

今後実施が可能になった場合は、コロナ禍に蓄積されたオンライン交流の技術を駆使した事前研修などを行い、学びの最大化へとつなげたい。

3. 3. 5 コラボ・スクール 双葉みらいラボ

コラボ・スクール双葉みらいラボは、生徒たちが放課後に集うコミュニティスペースである。学校と地域の「潮目」の場所として大学生や社会人、地域の大人たちとのナナメの関係に溢れた生徒にとっての学びの場となっている。そこは生徒たちの安心・安全な「居場所」であり、様々なことを挑戦できる「ステージ」でもある。

2019年4月新校舎への移転と共にプレハブ校舎から学校内へ移転して3年目を迎え、様々な法人・個人のご寄付に支えられながら、認定NPO法人カタリバのスタッフが常駐、運営。学校と協働する形で、地域協働スペース、協働学習ルームを使用し、毎日平日の放課後から20時まで運営が行われている。

(1) はじめに

コラボ・スクール双葉みらいラボは、ふたば未来学園内の地域協働スペース内に設置。施設内は大きく2つのエリアに分かれている。生徒が自学自習に取り組む協働学習ルーム、生徒が交流の場や居場所として用いる地域協働スペースである。

また施設内には「カフェふう」が併設されており、地域交流の起点として、卒業生や地域の大人なども含め、多様な人材が生徒に関わる場所となっている。

(2) 取り組み内容

○困難さへの対応

原発事故での避難経験や居場所不足から起こる心のケアや学習の遅れ、また思春期世代特有の複雑な悩み相談に、居場所支援や学習支援を通して対応している。

居場所支援では、カタリバのスタッフがユースワーカーとして常駐し、コミュニケーションを通して意欲喚起の土台となる「安心安全なセーフプレイス」をつくっており、生徒が先生や親、友だちには相談できないような悩みを打ち明けられる場となっている。

学習支援では、日常においてスタッフが学習指導を行っている。また定期考査前には福島大学と連携し大学生ボランティアによる学習支援を開催している。



～双葉みらいラボでの居場所支援・学習支援の様子～

○地域との連携・協働

双葉みらいラボを活用し、生徒主体で地域の方と打ち合わせやイベントを一緒に実施する姿が見られた。

地域協働スペースには、双葉郡8町村への理解を深めるために各地域の広報誌やイベント情報チラシがカウンターに並べられている。

また、オンラインを活用した地域連携も行われており、「探究・マイプロジェクトオンライン相談会」では、生徒の発表に対して地域の方々がアドバイスをを行い、その後の活動サポートに繋がっている。



～地域協働スペースを通じた地域の方々との交流の様子～

○未来創造探究のサポート

2・3学年で取り組まれる「未来創造探究」のサポートを行っており、双葉みらいラボのスタッフが「未来創造探究」の授業にアドバイザーとして教員とともにゼミ運営を行っている。具体的には、地域の大人・企業の講演やフィールドワークのコーディネーター、生徒同士の議論のファシリテーター等を通して、生徒の学びを広げるサポートを行っている。

また、放課後の時間もさらに探究学習に取り組みたいという生徒に対して、個別で面談を行ったり、資料作成のフォローをしたりしている。

活動に対するフィードバックを受ける場として、「社会貢献活動コンテスト」や「全国高校生マイプロジェクトアワード」などの外部機会に生徒を送り出す支援もしている。

(3) 今後の展望

双葉みらいラボには、今年度7,375名の生徒が来館している。今後は地域の方々が双葉みらいラボを活用しながら生徒との接点を持つことにより、生徒主体の地域協働の企画・実践の後押しや、学びと地域復興の相乗効果に貢献できる場所を目指したい。

3.4 外部連携実績

1年「地域創造と人間生活」お世話になった方々

活動名	日付	氏名	所属、役職		
コミュニケーションWS	2021.4.16	河野 悟	NPO法人PAVLIC		
		森内 美由紀	NPO法人PAVLIC		
		石本 径代	NPO法人PAVLIC		
		村田 牧子	NPO法人PAVLIC		
演劇WS	2021.4.21	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC		
		河野 悟	NPO法人PAVLIC		
		石本 径代	NPO法人PAVLIC		
		村田 牧子	NPO法人PAVLIC		
		有吉 宣人	NPO法人PAVLIC		
		宮崎 悠理	NPO法人PAVLIC		
		植浦 菜保子	NPO法人PAVLIC		
		北村 耕治	NPO法人PAVLIC		
双葉郡バスツアー	2021.7.7	木村 正信	浪江町役場		
		森 雄一朗	一般社団法人ならはみらい		
		松本 淳	株式会社FiveStar		
		堺 亮裕	一般社団法人葛力創造舎		
		松本 佳充	元双葉高校教員		
		磯辺 吉彦	広野わいわいプロジェクト		
		佐藤 亜紀	大熊町復興支援員		
		青木 淑子	3.11富岡町を語る会		
		平山 勉	双葉郡未来会議事務局代表		
		井出 寿一	一般社団法人かわうちラボ		
		演劇創作インタビュー	2021.10.6	鷲 周作	株式会社Jヴィレッジ
				下枝 浩徳	一般社団法人葛力創造舎
松本 佳充	元双葉高校教員				
森亮太	檜葉町				
菅原 文宏	ホテルリーブス代表取締役				
青木 淑子	3.11富岡町を語る会				
鈴木 謙太郎	木戸川漁業				
藤田 大	株式会社島藤本店代表取締役				
平山 勉	双葉郡未来会議事務局代表				
加井 佑佳	東日本史・原子力災害伝承館職員				
秋元 菜々美	富岡町職員				
木村 紀夫	大熊町				
西村 正夫	鹿島建設株式会社				
脇田 伸吾	鹿島建設株式会社				
清田 彰一	鹿島建設株式会社				
水野 静雄	鹿島建設株式会社				
大須賀 勝之	東京電力ホールディングス株式会社TEPCO福島復興本社				
花井真里奈	東京電力ホールディングス株式会社TEPCO福島復興本社				
青木 知里	東京電力ホールディングス株式会社				
演劇創作インタビュー	2021.10.13			鷲 周作	株式会社Jヴィレッジ
		菅原 文宏	ホテルリーブス代表取締役		
		鈴木 謙太郎	木戸川漁業		
		森 雄一朗	一般社団法人ならはみらい		
		青木 淑子	3.11富岡町を語る会		
		平山 勉	双葉郡未来会議事務局代表		
		加井 佑佳	東日本史・原子力災害伝承館職員		
		秋元 菜々美	富岡町職員		
		木村 紀夫	大熊町		
		松本 佳充	元双葉高校教員		
		西村 正夫	鹿島建設株式会社		
		脇田 伸吾	鹿島建設株式会社		
		清田 彰一	鹿島建設株式会社		
		水野 静雄	鹿島建設株式会社		
		大須賀 勝之	東京電力ホールディングス株式会社TEPCO福島復興本社		
		花井真里奈	東京電力ホールディングス株式会社TEPCO福島復興本社		
		青木 知里	東京電力ホールディングス株式会社		
		下枝 浩徳	一般社団法人葛力創造舎		
		演劇WS	2021.10.20	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC
				河野 悟	NPO法人PAVLIC
石本 径代	NPO法人PAVLIC				
森内 美由紀	NPO法人PAVLIC				
有吉 宣人	NPO法人PAVLIC				
宮崎 悠理	NPO法人PAVLIC				
植浦 菜保子	NPO法人PAVLIC				
北村 耕治	NPO法人PAVLIC				

活動名	日付	氏名	所属、役職
演劇WS	2021.10.27	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC
		河野 悟	NPO法人PAVLIC
		石本 径代	NPO法人PAVLIC
		森内 美由紀	NPO法人PAVLIC
		有吉 宣人	NPO法人PAVLIC
		宮崎 悠理	NPO法人PAVLIC
		植浦 菜保子	NPO法人PAVLIC
		北村 耕治	NPO法人PAVLIC
演劇創作	2021.10.28	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC
		河野 悟	NPO法人PAVLIC
		石本 径代	NPO法人PAVLIC
		森内 美由紀	NPO法人PAVLIC
		有吉 宣人	NPO法人PAVLIC
		宮崎 悠理	NPO法人PAVLIC
		植浦 菜保子	NPO法人PAVLIC
		北村 耕治	NPO法人PAVLIC
演劇創作	2021.10.29	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC
		河野 悟	NPO法人PAVLIC
		石本 径代	NPO法人PAVLIC
		森内 美由紀	NPO法人PAVLIC
		有吉 宣人	NPO法人PAVLIC
		宮崎 悠理	NPO法人PAVLIC
		植浦 菜保子	NPO法人PAVLIC
		北村 耕治	NPO法人PAVLIC
演劇ブラッシュアップ	2021.11.17	わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC
		河野 悟	NPO法人PAVLIC
		宮崎 悠理	NPO法人PAVLIC
		植浦 菜保子	NPO法人PAVLIC
演劇創作インタビュー	2021.12.08	喜多見 薫	元学校経営支援課主任
		石井 宏和	富岡漁港 長栄丸船長
演劇ブラッシュアップ		わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC
		石本 径代	NPO法人PAVLIC
		村田 牧子	NPO法人PAVLIC
		宮崎 悠理	NPO法人PAVLIC
演劇成果発表会	2021.12.14	平田オリザ	青年団
		わたなべなおこ	NPO法人PAVLIC
		有吉 宣人	NPO法人PAVLIC
		植浦 菜保子	NPO法人PAVLIC
		石本 径代	NPO法人PAVLIC
		鷲 周作	株式会社Jヴィレッジ
		松本 佳充	元双葉高校教員
		鈴木 謙太郎	木戸川漁業
		平山 勉	双葉郡未来会議事務局代表
		青木 知里	東京電力ホールディングス株式会社
		園部 隆	東京電力ホールディングス株式会社TEPCO福島復興本社
		日比 賢二	東京電力ホールディングス株式会社TEPCO福島復興本社
		下枝 浩徳	一般社団法人葛力創造舎
		西村 正夫	鹿島建設株式会社
		脇田 伸吾	鹿島建設株式会社
		西村 聡	鹿島建設株式会社
		吉越 巧	鹿島建設株式会社
		小田 浩暉	鹿島建設株式会社
		青木 淑子	3.11富岡町を語る会
		藤田 大	株式会社鳥藤本店代表取締役
		大須賀 勝之	東京電力ホールディングス株式会社TEPCO福島復興本社
		花井真里奈	東京電力ホールディングス株式会社TEPCO福島復興本社
		清田 彰一	鹿島建設株式会社
		水野 静雄	鹿島建設株式会社
		新井 和仁	鹿島建設株式会社
		加井 佑佳	東日本史・原子力災害伝承館職員
		秋元 菜々美	富岡町職員
木村 紀夫	大熊町		
高遠菜穂子	イラク人道支援ワーカー		
高遠菜穂子	イラク人道支援ワーカー		
国際理解教育	2021.12.15	高遠菜穂子	イラク人道支援ワーカー
マインドマップ講座	2022.1.19	内山 雅人	一般社団法人学びコミュニケーション協会代表

2年 未来創造探究 まとめ

探究ゼミ名	日付	氏名	所属、役職
原子力防災探究ゼミ	複数回	横須賀 幸一	富岡町観光協会事務局長
原子力防災探究ゼミ	複数回	猪狩 幸子	富岡町観光協会
原子力防災探究ゼミ	複数回	岩清水 銀士朗	株式会社いわきスポーツクラブいわきFC経営企画室室長
原子力防災探究ゼミ	複数回	川崎 渉	株式会社いわきスポーツクラブいわきFCプロモーションチームマネージャー
原子力防災探究ゼミ	複数回	石河 美菜	NPO法人クラブス
原子力防災探究ゼミ	複数回	日野 涼音	東北芸術工科大学
原子力防災探究ゼミ	複数回		東北チアプロジェクト
原子力防災探究ゼミ	複数回		クラブスチアリーダーズ
原子力防災探究ゼミ	複数回		みんなの交流館ならはCANvas
原子力防災探究ゼミ	複数回		富岡町文化交流センター学びの森
原子力防災探究ゼミ	複数回	小松 和真	広野町復興企画課課長
原子力防災探究ゼミ	複数回	大森 博隆	広野町広野暮らし相談窓口「りんくひろの」相談員
原子力防災探究ゼミ	複数回	磯辺 吉彦	特定非営利活動法人広野わいわいプロジェクト 事務局長、ちやのまプロジェクト
原子力防災探究ゼミ	複数回		NPO法人いわきイルミネーションプロジェクトチーム
原子力防災探究ゼミ	複数回	青木 淑子	
原子力防災探究ゼミ	複数回	松本 登志枝	広野町食生活改善推進協議会会長
原子力防災探究ゼミ	複数回	及川	
原子力防災探究ゼミ	複数回	石井	
原子力防災探究ゼミ	複数回	小豆畑 望	株式会社公益財団法人ふくしま海洋科学館命の教育チーム指導主事
原子力防災探究ゼミ	複数回	佐藤 勇樹	Bridge for Fukushima
原子力防災探究ゼミ	複数回	佐藤 至子	Bridge for Fukushima
原子力防災探究ゼミ	複数回	辺見 珠美	
原子力防災探究ゼミ	複数回	鈴木 みなみ	
原子力防災探究ゼミ	複数回	吉田 恵美子	
原子力防災探究ゼミ	複数回	大和田	みかんクラブ
原子力防災探究ゼミ	複数回	薄井 健文	双葉郡富岡町立富岡第一小学校 教頭
原子力防災探究ゼミ	複数回	松本 涼一	檜葉町立檜葉北小学校 教頭
原子力防災探究ゼミ	複数回	阿部 加奈子	広野町こども家庭課 係長
原子力防災探究ゼミ	複数回	桜井 聖子	広野町公民館生涯学習課 会計年度任用職員
原子力防災探究ゼミ	複数回	石上 克洋	福島県相双地方振興局県民環境部県民生活課 主事
原子力防災探究ゼミ	複数回	大場 美奈	広野町起業型地域おこし協力隊、ちやのまプロジェクト 代表
原子力防災探究ゼミ	複数回	遠藤 一善	富岡町議会議員
原子力防災探究ゼミ	複数回	山根 辰洋	双葉町議会議員、一般社団法人双葉郡地域観光研究協会
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.3.23	吉田 恵美子	NPO法人ザ・ピープル
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.10.18	吉川 彰浩	一般社団法人AFW
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.10.27	小波津 龍平	クムト
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	複数回	大和田 徹	広野町役場復興企画課
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	複数回	北郷 功	広野町役場復興企画課
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.7.17		いわきアカデミア協進議会
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.10.27	猪狩 僚	いわき市役所保健福祉部
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.7.7	中津	広野町振興公社代表取締役兼社長
メディア・コミュニケーション探究ゼミ		下枝、篠田、半澤	葛尾野外劇関係者
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.7		アニメツーリズム協会
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.9	吉田 徹	アニメーター
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.5	渡辺 正勝	元役場職員(生徒の祖父)
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.8	新妻 良平	広野町の農業家
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.8	佐久間 辰一	田村氏の農業家
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.8	菊地 英文	鳴子温泉観光協会
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.7		母園・横浜バーン
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	複数回		twitterで知り合った海外の学生
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	2021.10.27	平山 勉	ふたばインフォ
メディア・コミュニケーション探究ゼミ	複数回	青木 裕介	ぷらっとあっと
再生可能エネルギー探究	2021.6	松元 孝一	ドローン企画 一級建築士事務所
再生可能エネルギー探究	2021.6	渡邊友歩	浪江町役場 産業振興課
再生可能エネルギー探究	2021.7	小沢晴司	宮城大学 事業構想学群
再生可能エネルギー探究	2021.1	原田正光	福島工業高等専門学校 都市システム工学科
再生可能エネルギー探究	2021.12	永井祐二	早稲田大学 環境総合研究センター
再生可能エネルギー探究	2021.12	山田美香	早稲田大学
再生可能エネルギー探究	2021.12	青木裕介	プラットアット

探究ゼミ名	日付	氏名	所属、役職
アグリ・ビジネス探究ゼミ	複数回	三戸 豪士	GSauto
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2021.10.13	古林 秀雄	株式会社 レイス(RACE Co.,Ltd.)工場長
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2021.10.13	國井 佳奈	株式会社 レイス(RACE Co.,Ltd.)研究部係長
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2021.12	松本 正人	広野町副町長
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2021.12	根本 明和	広野町産業振興課
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		広野町みかんクラブ
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		広野小学校
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		広野町役場総務課
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		広野町認定こども園
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	権丈 泰巳	日本パラサイクリング連盟専務理事
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	寺澤 亜彩加	noreru
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		ふたば未来学園高校教職員
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		いわきFC
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	今井 純子	日本サッカー協会女子委員長
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	佐藤 慶	福島県サッカー協会
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	林 雄一	勿来フォーウインズ監督
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		Jヴィレッジ
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	青木 淑子	NPO法人3.11を語る会 代表
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		スポGOMI
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	馬見塚 健一	ソーシャルスポーツイニシアチブ
健康と福祉探究ゼミ	複数回	江川 賢一	東京家政学院大学
健康と福祉探究ゼミ	複数回	永井 祐二	早稲田大学
健康と福祉探究ゼミ	複数回	水口 公美	ふたば未来学園中学校 栄養教諭
健康と福祉探究ゼミ	複数回		広野町立こども園
健康と福祉探究ゼミ	複数回		リリー園
健康と福祉探究ゼミ	複数回		南相馬市小高区
健康と福祉探究ゼミ	複数回		広野町立こども園
健康と福祉探究ゼミ	複数回		富岡特別支援学校
健康と福祉探究ゼミ	複数回		檜葉町役場

3年 未来創造探究 まとめ

探究ゼミ	日付	氏名	所属、役職
原子力防災探究ゼミ	複数回	中津弘文	広野町振興公社
原子力防災探究ゼミ	複数回	西本由美子	特定非営利法人ハッピーロードネット
原子力防災探究ゼミ	複数回	橋爪清成	福島高校
原子力防災探究ゼミ	複数回	高橋洋充	福島県立福島東高等学校
原子力防災探究ゼミ	複数回	吉田秀亨	古代製鐵研究所 所長／川俣町教育委員会生涯教育課 主任専門員
原子力防災探究ゼミ	複数回	高島祥太	福島県いわき市遠野町地域起こし協力隊
原子力防災探究ゼミ	複数回	平子めぐみ	福島県いわき市遠野町地域起こし協力隊
原子力防災探究ゼミ	複数回	小林祐子	福島県いわき市遠野町地域起こし協力隊
原子力防災探究ゼミ	複数回	吉川彰浩	一般社団法人AFW
原子力防災探究ゼミ	複数回	澤田哲生	東京工業大学
原子力防災探究ゼミ	複数回	高橋徹治	原子力発電環境整備機構
原子力防災探究ゼミ	複数回	松本淳	株式会社Five Star
原子力防災探究ゼミ	複数回	高橋大就	一般社団法人 東の食の会
原子力防災探究ゼミ	複数回	前司昭博	一般社団法人 浪江町商工会議所
原子力防災探究ゼミ	複数回	安達 有希	NARA-ROMA.COM
原子力防災探究ゼミ	複数回		公益社団法人 福島相双復興推進機構
原子力防災探究ゼミ	複数回	先崎信一	常磐共同ガス株式会社 エナジーパークひろの
原子力防災探究ゼミ	複数回		東日本大震災・原子力災害伝承館
原子力防災探究ゼミ	複数回	齋藤健一	いわき市役所遠野支所
原子力防災探究ゼミ	複数回	松岡教授	早稲田大学
原子力防災探究ゼミ	複数回	永井祐二	早稲田大学
原子力防災探究ゼミ	複数回	藤安将平刀匠	
原子力防災探究ゼミ	複数回	高橋徹治	原子力発電環境整備機構
原子力防災探究ゼミ	複数回	石本 豊昭	原発のごみ処分を考える会
原子力防災探究ゼミ	複数回	永田 夏樹	一般社団法人 日本原子力文化財団
原子力防災探究ゼミ	複数回	碓井 天津博	東京電力ホールディングス株式会社
原子力防災探究ゼミ	複数回	加藤正人	東京電力ホールディングス株式会社
原子力防災探究ゼミ	複数回	庄司結衣	浪江プロモーション課
原子力防災探究ゼミ	複数回	田河 朋裕	なみえ焼きそば製麺所 旭屋
原子力防災探究ゼミ	複数回	下枝浩徳	葛力創造舎
原子力防災探究ゼミ	複数回	那須名奈子	一般社団法人ふたばプロジェクト
原子力防災探究ゼミ	複数回	祓川正道	一般社団法人ふたばプロジェクト
原子力防災探究ゼミ	複数回	石上 崇	一般社団法人ふたばプロジェクト
原子力防災探究ゼミ	複数回	高橋洋充	福島県立福島東高等学校
ｽﾏｰﾄﾞ ｱｲ・ｺﾐｬﾝｴｰｼｮﾝ探究ゼミ	2021.6.16	菅波 香織	
ｽﾏｰﾄﾞ ｱｲ・ｺﾐｬﾝｴｰｼｮﾝ探究ゼミ	2021.6.16	田子恵子	放デイU.AND舎代表
ｽﾏｰﾄﾞ ｱｲ・ｺﾐｬﾝｴｰｼｮﾝ探究ゼミ	2021.6.16	藁谷弘子	Re.yoga.Lotusの代表
ｽﾏｰﾄﾞ ｱｲ・ｺﾐｬﾝｴｰｼｮﾝ探究ゼミ	2021.6.23	猪狩幸子	富岡町観光協会
ｽﾏｰﾄﾞ ｱｲ・ｺﾐｬﾝｴｰｼｮﾝ探究ゼミ	2021	平山勉	ふたばいんふお
ｽﾏｰﾄﾞ ｱｲ・ｺﾐｬﾝｴｰｼｮﾝ探究ゼミ	2021	青木 裕介	ひろのパソコン教室
ｽﾏｰﾄﾞ ｱｲ・ｺﾐｬﾝｴｰｼｮﾝ探究ゼミ	2021	堀江莉帆	OBOG
ｽﾏｰﾄﾞ ｱｲ・ｺﾐｬﾝｴｰｼｮﾝ探究ゼミ	2021	高橋七海	OBOG
ｽﾏｰﾄﾞ ｱｲ・ｺﾐｬﾝｴｰｼｮﾝ探究ゼミ	2021	秋山杏由子	OBOG
ｽﾏｰﾄﾞ ｱｲ・ｺﾐｬﾝｴｰｼｮﾝ探究ゼミ	2021	森崎陽	OBOG
ｽﾏｰﾄﾞ ｱｲ・ｺﾐｬﾝｴｰｼｮﾝ探究ゼミ	2021	及川滉太	OBOG
ｽﾏｰﾄﾞ ｱｲ・ｺﾐｬﾝｴｰｼｮﾝ探究ゼミ	2021	吉田智美	OBOG
ｽﾏｰﾄﾞ ｱｲ・ｺﾐｬﾝｴｰｼｮﾝ探究ゼミ	2021	佐藤勇樹	OBOG
ｽﾏｰﾄﾞ ｱｲ・ｺﾐｬﾝｴｰｼｮﾝ探究ゼミ	2021	山澤世和	OBOG
ｽﾏｰﾄﾞ ｱｲ・ｺﾐｬﾝｴｰｼｮﾝ探究ゼミ	2021	田口未来	OBOG
ｽﾏｰﾄﾞ ｱｲ・ｺﾐｬﾝｴｰｼｮﾝ探究ゼミ	2021	遠藤匠	OBOG
ｽﾏｰﾄﾞ ｱｲ・ｺﾐｬﾝｴｰｼｮﾝ探究ゼミ	2021	猪狩幸子	富岡町観光協会
再生可能エネルギー探究ゼミ	複数回	鈴木 正範	NPO法人浅見川ゆめ会議 理事長
再生可能エネルギー探究ゼミ	2021.5.1	高荒 智子	福島高等専門学校建設工学科 准教授
再生可能エネルギー探究ゼミ	2021.6.23	松本 幸英	双葉地方水道企業団 企業長
再生可能エネルギー探究ゼミ	2021.6.23	松本 有加	双葉地方水道企業団
再生可能エネルギー探究ゼミ	2021.7.7		東京電力廃炉資料館
再生可能エネルギー探究ゼミ	2021.10.20		櫛葉遠隔技術開発センター
再生可能エネルギー探究ゼミ	2021.11.17	松本 広行	櫛葉町ユズ研究会 会長

探究ゼミ	日付	氏名	所属、役職
再生可能エネルギー探究ゼミ	2021.12.8	永井 祐二	早稲田大学理工学術院 環境総合研究センター 主任研究員
再生可能エネルギー探究ゼミ	2021.12.21	日比 賢二	東京電力ホールディングス株式会社福島復興本社部長
再生可能エネルギー探究ゼミ	2021.12.21	大須賀 勝之	東京電力ホールディングス株式会社福島復興本社副部長
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2021.7.17	西崎 芽衣	ならはみらい
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2021.7.17	木村 英一	ならはみらい
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2021.8	李 洸昊	早稲田大学
アグリ・ビジネス探究ゼミ	2021.12	坂上 英和	NPO法人コースター
アグリ・ビジネス探究ゼミ	複数回	猪狩幸子	富岡町観光協会
アグリ・ビジネス探究ゼミ	複数回	中津 弘文	広野町振興公社
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	大和田さん	広野町みかんクラブ 代表
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		広野小学校
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		檜葉北南小学校
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		広野中学校
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		檜葉中学校
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	小名山さん	Jヴィレッジ
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	明石さん	Jヴィレッジ
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		いわきFC
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		広野野球スポーツ少年団
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	佐藤さん	富岡さくらスポーツクラブ
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		NPO法人 うつくしまスポーツルーターズ
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		広野町認定こども園
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		広桜荘
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		つくし会
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		富岡支援学校
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		県内特別支援学校
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		潮田玲子さん
スポーツと健康探究ゼミ	複数回	檜山さん	JFAメディカルセンター
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		二ツ沼総合運動公園
スポーツと健康探究ゼミ	複数回		東日本国際大学
健康と福祉探究ゼミ	2021.4.2	青木裕介	多世代交流スペースぷらっとあっと
健康と福祉探究ゼミ	2021.4.2	大場美奈	多世代交流スペースぷらっとあっと
健康と福祉探究ゼミ	2021.7.17	後藤采納	長岡造形大学
健康と福祉探究ゼミ	複数回	遠藤浩一	広野町居宅介護支援事業所 広桜荘
健康と福祉探究ゼミ	2021.6.18	松本聡二	広野小学校 教頭
健康と福祉探究ゼミ	複数回	櫻井聖子	広野町公民館
健康と福祉探究ゼミ	2021.6	古内伸一	広野町社会福祉協議会
健康と福祉探究ゼミ	複数回	小林誠	高野病院 看護部主任

3. 5 未来研究会

変革者としての生徒の資質能力向上と、教員の指導力向上のために行われてきたのが本校の現職教育「未来研究会」である。地域・世界の中の学校として、どのようなカリキュラムが実現されるべきかについて、その具体策について教職員どうしが議論を行い、外部から講師を招待しカリキュラムの実現に必要な知見を得る機会として開校時から行われてきた。しかしながら、中高一貫校としての完成年度となる今年度当初、本校教職員の多忙感の解消(Teacher's Well-being の実現)については課題があった。

(1) はじめに

中高のそれぞれの現職教育の計画や学校行事のスケジュールをもとに、今年度の未来研究会の方針を策定した。

ルーブリックの活用方法(形成的評価へのつなげかた・ルーブリック面談のコツ)や、**変革者としての資質・能力の向上を意識した場面を組み込んだ授業の在り方**を未来研究会の中で議論することで、中高横断で資質・能力の育成に取り組むことを目指し、今年度の未来研究会として次のような内容を取り扱うこととした

(2) 実施内容

年度当初に検討された内容は以下の通り。

①ルーブリックの活用方法や資質能力伸長の評価方法についての共有

ルーブリックの資質・能力を、中高の探究や各教科等の授業を通じて高める方策について、高校でも次年度より始まる観点別評価(学習評価の3観点)とルーブリックによる形成的評価の関連について、中学教員の知見も生かしながら議論する。

②探究活動指導法の研修

中高で探究活動指導方法を共有し、日常の指導に直結する形で指導法を議論する。

③外部講師来校時等のワークショップ

哲学対話や演劇製作の講師によるWSや他地域や他国の方と生徒・教師が対話や議論を行う機会を保障する。

④外部研修・外部発表の伝達研修

大学や他校での探究指導方法の講義(オンライン含)や、本校来校者へのプレゼンテーションなどでの発信内容を共有。

⑤クロスカリキュラム関係

昨年度までの実践を生かし、より「普段使い」で「年間計画から大きくそれない」形で実現。

(3) 成果(2021年末時点)

①7月 互見授業期間

8月5日 互見授業期間振り返り研修

②4月5日 着任者フィールドワーク

5月19日 ICT活用研究会

③6月25日 北角裕樹氏講演会

11月11日 飯盛義徳氏・田熊美保氏ワークショップ

④福島大学にて講義

⑤各教科で複数回実施

(4) 課題と展望



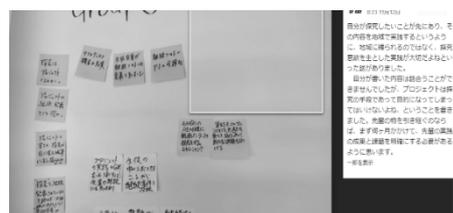
参加者と欠席者が継続したアイデア出しをするためのジャムボード



北角氏による講演会のYouTubeの共有



飯盛氏・田熊氏とのワークショップ、講演会の動画の共有。



ワークショップ中に使用された模造紙を写真で共有した。オンラインでコメントが付いた。

未来研究会として持続していくうえで、今後の課題となるのは、中高の接続を教員の中でもスムーズに行える体制づくりと実施までのプロセスの効率化である。

前者について、現状は、高校教員が中学の授業を担当する方法での交流を行っているが、中高をまたいで探究的な学びの橋渡しをするような機会や、6年間を見通した探究活動のデザインについての共有知が十分ではない。学校文化の異なる部分を強みにして、中高接続時に学びが止まらないカリキュラムにしていくことが求められる。

中高共通して早急に必要とされるオンライン授業に関する研修については、年度初めの段階で実施したことにより、突然の休校時にもスムーズにオンライン授業に取り組む体制づくりにつながった。現職教育についての中高それぞれのニーズを改めて考え、適切な時期に実施することで、今年度のオンライン授業研修のように、納得感のある教員研修を行うことにつながるのではないかと感じた。

後者について、これまでの未来研究会は考查期間中にまとめて行われることが多かった。しかし、完成年度に差し掛かり、中高それぞれの考查期間がずれ、多忙な時期もそれぞれずれてきた。これまでの形で持続していくことが難しくなっている。また、外部講師に依頼を行い、人を集めて集合研修を行うまでの手続きも、持続させることを困難にさせる一因となっている。

中高それぞれの探究活動に向けた指導者の月次会や打ち合わせは定期的に行われている。このような、日常の会合から学ぶことは多い。今年度十分に周知することはかなわなかったが、他学年やゼミの会合にオブザーバーとして気軽に参加できるような風通しも必要ではないかと考える。

主体的、創造的、協働的な学びを実現するためには「エージェンシー」の高まりが必要である。OECDによれば、これは、「変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」を言う。

しかし生徒エージェンシーは一人だけではぐくまれるものではない。共同エージェンシーとして、親や仲間、教師や地域住民等との交流の中で身に付いていくものでもある。

未来研究会の中で、「生徒プロジェクト継続性と学びの深化が両立可能なものであるか」を議論してきたが、今後の教員チームの現職教育を通して、校内外のステークホルダーと協働して、主体的・創造的・協働的な学びを実現できるようにしたい。